

FADO

30

Abril 2001

月田秀子ファド倶楽部

TSUQUIDA HIDEKO FADO CLUBE JORNAL

月田秀子の昨日、今日、明日…

1、2、3月は、定期ライブ以外にほとんど仕事無し。干上がりついでに、エイツとばかり、野上圭三は、ネパールへ、私はリスボン詣で。

帰国した翌日、1月29日に亡くなった「三裕の館」のマスターであり、循環・自然農法実践者であり、建築士でもあった小川土風氏の「最後の個展」にでかけた。彼の熱い要望で、月一度のライブを始めてはや3年になる。生前描きためたスケッチブック、写真、晩年の「月」シリーズが展示してあった。ほとんどの人にとって初めて見る故人の素顔、土風氏の宇宙がそこにはあった。口数の決して多い人ではなかった。土くれの様子がちりちりとした風体の中にどんな風が吹いていたのだろう。その肉体が消え、彼の中に吹いていた風だけ、残された私たちに向かって吹いている様な気がした。それは、言葉にもならず、彼を知るよすがにもならず。

年がいった証拠なのだろう、このところ、私にとって大切な人達が立て続けにこの世を去っていった。そして、こう思う。人は、この世から消えても、残された人の心の中に生き続けるものなのだ。

京都から、2月11日のコンサートのアンケートのコピーが届いた。このコンサートは、京都の「巴里野郎」のライブの常連、平井、高木、長岡、3氏を核にした「ファドINきょうと」の企画によるものだ。京都で、初めての本格的なコンサートだった。人が集まるか、採算がとれるのか、彼らの不安をよそに、当日は定員をオーバーする200名近くの方が来場。元毎日新聞京都支社のレトロな雰囲気とファドがぴたり合い、大好評をいただいた。神戸、宝塚、大阪、奈良から駆け付けて下さったファンもかなりいた。実は、私も、会場の雰囲気に乗せられ、とても気持ちよく歌わせていただいた。それ以上に、会場選びの大切さ、空間を活かす演出の必要性を実感したコンサートだった。アンケートに寄せられたご感想、ご意見等を活かして、来年のステージに繋げたいと思っている。お骨折りいただいた3氏、お手伝いいただいた方々、ご来場下さった皆様に、ありがとう。

最近、衣装を褒めて下さったり、きれいになったなんて嬉しいお言葉を頂くが、これはすべて、北海道ファドファン倶楽部のお歴々のお蔭なのです。花は毎日「きれいだよ」というと実に見事に咲くというではありませんか。影の立て役者は、千田マネージャー、貴女なのですぞ。6月、彼女の並々ならぬ尽力で、7か所にも及ぶ北海道公演が決まった。各地、手作りの自主公演。本当にありがとう。皆さん、6月の北海道にでかけてみませんか？千田女史が、細い優しい目で手ぐすねひいて待っている…？

月田秀子のポルトガル紀行 —リスボン2001年早春編—

今、私は夜の帳の下りたリシュボアにいる。

前日の夜の京都でのコンサートのほとりもさめやらぬまま、今日の昼過ぎ私は、パリ行エアフランス291便に乗り込み、パリでリシュボア行きに乗り継いだ。飛行機はひたすら夕日を追いかけ、追いつけないまま、夜のリスボン空港に着いた。腕時計は6時をさしていた。日本ではもう夜が明ける頃だ。機体がポルトガルの大地に着陸すると同時に、私は時計の針を9時に合わせた。その時から、というより、眼下にちらちらと揺れるオレンジ色の明かりが、テージョの河を縁取るのを見た時から、私は、日本での一切の事を忘れた。ホテルにチェックインして、シャワーを浴び、春を思わず暖かさに、ページの半袖のセーターに着替え、コートを羽織った。20時間近い長旅の疲れはあるものの、鏡に映る顔は、まるで久し振りに恋人に逢いにゆく女のように晴れ晴れとしている。薄ルージュを引き、夜中近い町に飛び出す。まだ、「マシャード」は開いている。カルロス・ゴンサルヴェスがポルトガルギターを弾いている店だ。「*Senhor, até Bairro Alto, se faz favor. 運転手さん、パイロアルトまで、お願い。*」

「マシャード」に、あいにくカルロスは出演していなかった。5年ぶりくらいに「オ・ファイア」へ行った。レニータ・ジェンティルの最後のステージに間に合った。13年前、ファドの祭りの時に共にゲスト出演した女性歌手だ。若さで眩しいほどだった彼女は、肉付きもよくいかにもファディスタらしい風格にあふれていた。昔は声だけで歌っていた感があったが、しっとりとした情感あふれるファドを聴かせてくれた。いくつか恋もし、男にも泣かされたんだろうな。過酷な現実人は人を、豊かにもするし、卑屈にもする。彼女はいい年をとってるな、と勝手に思いを巡らす。「懐かしのリシュボア」の間奏の合いの手を誘われるがままに歌った。「13年前のファドのお祭りの時初めてあなたの歌を聞いたし、CDも持っているけど、いまのあなたはもっと素敵」私は名乗らなかったし、きっと彼女は、覚えていないのだろう。「ありがとう」そうほほ笑んだだけだった。それでいいと思った。お互いに昔の自分ではないのだから…。

ホテルに戻り、窓を開けると、生暖かい風が夢の様だった。大好きなオレンジ色の街灯がテージョ河に揺れていた。「おやすみ、又、あした目が覚めたら、朝のあなたを見せてね。」

ロングランを続けている「アマリア・ロドリゲス」の自伝的ミュージカル『AMÁLIA』を観た。主役のアマリアを演じているのはアレキサンドラ。彼女の生の声を聞くのは初めてだ。少女時代と、若い頃のアマリアは別の配役だった。舞台よりも観客の反応が気になった。歌が終わるとわんざの拍手。特に、終盤アレキサンドラがアマリアそっくりの歌いぶり「川辺の民」を歌い終わった時などは、アマリアの生前の会場さながらの盛り上がりだった。観客の一人一人が、ミュージカルの一員となっていた。最後のカーテンコールでは観客全員が総立ちだった。

(次頁へ続く)

「難船」「どんな声で」「かもめ」の作曲者アライン・オールマンが随分とクローズアップされていたのは、監修のフィリップ・ラ・フェイラの政治的な思い入れによるものだと思う。

一人の人間の捉え方は、それぞれだ。それを捉える人の価値観、感性、そして、時代、体制の如何によってどうにでもなる。

そんなふうに結構冷静に観ていた私の涙腺が緩み始めたのは、アマリアの肖像画を描いた女性画家の死の知らせにアマリアが泣き崩れるシーンあたりからだ。その前の晩に、私はアマリアの家を訪ねたのだ。一日遅れていたらアマリアに逢う事はできなかっただろう。そして、最後の抱擁もできなかっただろう。

—初めてアマリアに逢った時、「あなたは、日本語で歌いなさい。」と言われた。それを聞いていた友人は、「アマリアは秀子に嫉妬している。何て狭い心の持ち主なんだろう。」と憤慨していた。その次逢った時は、「秀子が私の歌を歌ってくれている限り、私は、生きています。」と言って、「次なるアマリアへ、賛辞を込めて」とのサインを歌手生活50周年コンサートのレコードのジャケットにして下さった。—そして、あの晩の出来事が、嬉しいはずの会見の一部始終が思い出された。「秀子、あの時の日本の歌を歌って」とのアマリアのリクエストに当惑しながらも「竹田の子守歌」を歌った。

「秀子は、私から、すべてを奪うだろう」同行した友人フェルナンダは、アマリアのその一言を聞き漏らさなかった。わたしは拙いポルトガル語で、必死に誤解をとこうとした。「アマリア、あなたのおかげで私はファドを知り、歌い始めた。今の私があるのはあなたのお蔭なの。」

あなたは私に生きる事も教えて下さったの。ありがとう。アマリア。」私は、今でも、心の中でそうつぶやいてから、ステージに立つ。会場を出て、人々の流れから逃れる様に、私は、コリゼウム劇場の脇の暗い石段を上がっていた。涙は暗がりに入ると、一気にあふれ出た。気が付くと、アマリアの生まれた家の前に立っていた。「アマリア、あなたの大切にしてきたファドを歌う事をどうか許して下さい。あなたを愛しています。そして、あなたのために素晴らしいファドの数々を、命懸けで作曲したアライン・オールマンを、あなたのビデオのなかでしか見たこともない、逢ったこともない人を愛する事を許して下さい。」そこにいるはずもないアマリアに向かって目をつむり、頭を垂れた。アライン・オールマンの深いまなざしをビデオで垣間見た時から、私は彼に恋してしまったのだ。逢ったこともない、逢えるはずもない人に。彼は、私がポルトガルから帰国した翌年にこの世を去っているのだから。そして、そのことを私は、私の記事が掲載された現地の新聞の同じページに報じられているのを読んで知ったのだ。彼の歌を歌う時だけ、私は彼に会える。アマリアはそのことを知っていたのかもしれない…。

翌日のタクシーのバックミラーにミュージカルのアマリアの写真がぶら下がっていたので、「ファド好きなの？」と尋ねると、いかにも質素に暮らしている様な若い運転手君の反応がもう一つだ。「ミュージカル見た？」と尋ねたら、「みんながいいって言うから一度見にいかなきゃと思っているんだけどー」という答えが返ってきた。今、リスボンは、失ったファドのミュージズへの最後の静かなる陶酔と賛辞に満ちている。

ensaio

「一本の道 —リスボン市電28番線—」を見て 小嶋良之／静岡

2001年1月6日、NHK教育テレビで「一本の道 —リスボン市電28番線—」が再放送された。月田秀子の雄姿を前回見逃しただけに、今度こそビデオも撮りながら拝見した。

昨年11月。奇しくもスペインのサンティアゴ巡礼を経て、二度目のポルトガルの地への旅となり、再びファドと巡り会うことができた。前回同様、リスボンの二泊は、ファド漬けとなった。

市電28番線を何度見たことだろう。日本では考えられないほど至近距離を走り過ぎていく。車がやっと通れるほどの路地を、市電が猛スピードで駆け抜ける。よく事故が起こらないものだと思うが、そこは阿吽の呼吸とでも言えばいいのか、リスボンの人々にとっては、身体の一部のようになっている。

昔、私たちの周辺にも「路地裏文化」があった。そこには義理人情がドッカーリと居すわっていた、自然な助け合い文化があった。そして、隣近所は家族同様だった。そんな風情が、ここリスボンの路地には生きている。だからなのか、懐かしさや郷愁が伝わってくる。

暗がりに温かな明かりを灯したような優しい夜の路地裏。ファドが漂っている。この神秘的な夜の空気が、ファドを一層際立たせてくれる。暗く寂しい中に灯っている一筋の光。今風にいえば、癒しの世界がそこにはある。

そして、ファドは、人生の様々な積み重ねがそのまま、波動として

伝わってくる。夜の闇が次第に深くなるに従って、それと歩調を合わせるかのように人生の喜怒哀楽を備えたファディスタが登場する。お腹の芯にまでズシッと声が滲みってくる。身体中の細胞に耳があって、それぞれの細胞がバイブレーションしていき感じなのだ。細胞の中を声が駆け抜けていく。鳥肌が立つほどゾクッとする瞬間、私の世界のすべてが声に支配され、ある種の「無」の境地に近い覚醒された至福の時間が全身を包んでいく。それが「サウダーデ」を満たしてくれる。

「サウダーデ」は、嘆き、悲しみ、叫び、情念、孤独、愛、刹那さ、郷愁、暮る思いと様々に表現されるが、そうした全ての思いを凝縮した「魂の蠢き」の様に感じる。歌い手と聞き手という関係を乗り越えて、その空間を共有するすべての人々の思いを、ファディスタが全身で表現している。一人一人が心の底に秘めている情念がファディスタに乗り移って、自らの叫びを聞いているかの様な響きの空間がファドの世界なのだ。単なる一歌手の歌ではないのだ。リスボンの大地の、魂の声なのだ。もちろんポルトガル人ではないので、想像でしかないが、一緒にファドに感じていると、そうした思いが伝わってくるから不思議だ。

「一本の道—リスボン市電28番線—」の中で、リスボンの町の人たちが楽しむファドの宴で、月田秀子が歌う場面がある。ポルトガルのファディスタの声は、直球勝負。そして月田秀子の声は、変化球の中に直球が混じっている。その変化球は、たおやかで微妙なバイブレーションを持って伝わってくる。月田ファド・ワールドともいえる独自のファド空間がそこにある。その響きがたまらない。月田秀子の響きは、21世紀も私たちの魂を揺さぶり続けてくれる。

●12月25日は、よか唄きことができありがとう。竹島さんより前から聞いておったですが、テープも「おくれ!」といってもらってきました。実際に会って、唄きいてみて、生きざまというか、あなたの姿勢、基本というものが一筋光となつてはりつめたまま、さわやかに通っておるばいと、あらためて奥の深さば見ることができました。ありがとう。月田さん、ぜひ又であいに、唄ききにいくです。どうかお元氣にお暮らし下さい。ご健康祈ります。感謝します。(N.F子/熊本)

(水俣の緒方氏の血のにじむ様な戦いの軌跡「常世の船を漕ぎて」を読んでる時に、又しても、熊本弁のお便り。力強いお言葉ありがとう。)

●テープありがとうございます。楽しませてもらってます。発見しました。冬の景色に月田さんの唄がとてもぴたりしたのです。松本へゆく車の中でオーディオのボリュームをいっぱいあげて車中ライブを一人楽しみました。まわりは雪、山々も美しい雪山、涙があふれたり、ゆっくり落ち着く自分がいたり、とてもうれしい時間でした。わたし一人こんな幸せをもらってしまってよかったのかなと。神に感謝!! いつまでもあの素晴らしい声がきくことができますように!! かりんの瓶詰送ります。(古屋美佐子/小諸ユースホステル)

(すぎ透ったかりんの蜂蜜漬け、日にかざしてみました。小諸の浅間のお山が見える様でした。一切れ食べたら、喉を澄んだ風が通り過ぎました。)

●このたびは「一本の道」のVTRお送り下さりありがとうございます。早速家内と拝見しました。心にくる素晴らしい映像でした。スイッチを入れた途端、画面の隅々から我が家にポルトガルの空気が流れ込み、最後にテロップが流れる頃には、カルメリンダおばさんや秀子さんたちが今にもドアを開けて入ってくるのではないかと思つた程でした。市電が町中を走る光景中々いいですね。思わずわが街の「チンチン電車」と比べてしまいました。又、ナビゲーター役の秀子さんが普段のままで特にいいですね。言葉少ないけれど、(それが又いい)貴女の思いや感性が見るものに伝わってきました。祭りに集う人々、ファドの夕べに集う人々、その他秀子さんたちが出会った人々、メンタリティーに各々のサウダーデをもつポルトガルの人達みんないい顔をしていますね。大勢の人達がアマリア・ロドリゲスの葬儀に参列したとのこと。お墓には今もお花が絶えることなく供えられていましたね。しかも歌手の葬儀が国葬であったとのこと。本当にファドを愛する人達なんですね。このVTRを見て、「何故月田秀子はファドを歌い続けているのか?」という謎が少し解けた様な気がしました。次回からのライブの聞き方も少し変わるかもしれません。楽しみです。秀子さん、オブリガード!

(大阪/N・H)

(画面からそちらにお邪魔して、一杯やりたかったな。)

●ポルトガルは、遙かの昔から私たちが住む国と深い関係にあるながらも、つい最近までファドという言葉も、サウダーデという言葉も、ポルトガルの唄を専門に唄っている唄い手さんがいることも、月田秀子という唄い手さんも全く知りませんでした。今日初めて見、聴きたところ。ファドについて、ある月刊誌は怨歌という説明をつけていました。それが正しいのかどうかよくわからない聴き手で

すが…。月田さんの素晴らしい、女性としての凄魅力、お見事というしかありません。(京都公演アンケートより/N・K男)

●ファンの長年の念願の京都でのコンサートを実現させて頂き大変感動致しました。生きとし生けるものすべての人々の心を動かす熱唱、月田秀子独特の世界に魅せられました。早いもので平成3年に「巴里野郎」のライブで初めてご縁をいただいてから、年々ファンの輪が大きくなり嬉しい限りです。ますますのご活躍念じ上げます。(京都公演アンケートより/Y・K子)

●「聞き流しているうちに英語が上達する」というテープのPRを新聞、雑誌でみかけるが、私の体験では、当時の2か月分の給料を注ぎ込んだリングフォンのレコードが、ものの役に立たなかった。私が月田さんのCDを購入したいと思いつながら「やはり辞めよう」と思い直すのは、経済的な理由というより、ライブでの感激を心の中で反すうしていたいからだと言っても嘘にはならないと思う。3月7日の「三裕の館」でのライブに私の心がどれだけ震えたか? おそらくCDやテープで月田さんの歌に常に馴染んでいるファンには気の毒だが分かってもらえまい。その代わり、ライブの場で月田さんとハミングする特権はその人達に譲らねばならぬが…。

越路吹雪は大きなステージを縦横に使って大変な人気を博したけれど、月田さんの魅力は、やはり客席を縫って洩れ聞こえてくるモノローグから始まってクライマックスのフォルテシモに至る表現力の幅の広さだとつくづく思う。あえて声という言葉を使わないのは、彼女のオリジナルつぶやきは、すでに詩(うた)であり、物憂げな仕種がサウダーデという舞踊だから…。

二十代の頃、ギーゼキングという名ピアニストの演奏会で、私の様な素人にも分かるミスタッチを何度も繰り返す彼に聴衆も動揺せず、本人も何事もなく弾き続けるのに驚いたが、この老ピアニストは、若い時からレコード録音の際の編集を一切認めなかったという事を大分時間が経って知った。編集して完璧な音を作るより、ミスタッチのままで音楽の流れを残す方がよいという彼の持論は、まさにライブを大切に思う月田さんに相通じるものがあり、あらためてミスタッチをしても大家としてみとめられている理由を納得したものである。

マイクの発達で大会場でのコンサートは当たり前現在の現在ではあるが、月田さんのファドはやっぱり客席のさんざめきの間から聞こえてくるのが最高だ。客の雑談や椅子のさしみて聞こえないモノローグが一瞬あってもよいではないか。どうせポルトガル語で歌い始めればその歌詞の全てを理解する日本人は多くないのだし…。

ラベルのポレロという曲は考えてみれば実に単調な曲だが不思議に何度聴いても感動がある。あれは多分、聞こえない音からフォルテシモ、そして又次第に遠ざかり消えてゆくその流れにこちらの注意力が誘い込まれて、いつの間にか聴くという受動的な立場から、遠ざかる音、又はキャラバン隊の後ろに心がついてゆく為だろうと思う。

そう考えてみると、月田さんのコンサートは、かなり大会場であっても、あのポレロの持つ魔力を利用して、聞こえない月田さんの眩しさも聴衆の参加意識を高めるファクターとして、次第に自分の客席に近づいて来る月田さんへの期待をクレッシェンド、そしてそれぞれの聴衆に語りかけ、歌い上げるクライマックス、遠ざかるデクレッシェンドを考えればコンサート自体の構成と別の聴衆個々の

(次頁へ続く)

cartas

クライマックスシーンが記憶に残るわけで、おしなべてみんなに平等に聞こえるというのではない本当のライブコンサートも成りつのではないだろうか?そんなコンサートをどこかで一度プロデュースしてみたいな…と思う今日この頃である。(大阪/I・T大)

(人が喜んでくれるのを見るのが好きなんです。ご自分のことなど、見てくれのことなど構わず、本物を探し、見つめるあなたの目は子供の様だと思いました。そんなさんの思いに答えられる様なステージ、きっと創ってみます。)

●好きな道を貫くこと、生まれつきの星を信じること一月田さんからいただいた手紙の中にはご自身の血から生まれた言葉がそのまま記されているように感じることができました。私も又、その言葉の通り生きていく思いで日々格闘しています。もともと絵描きから出発し、デザイン、そして写真へと進んできました。

写真においては下積みも含めて十数年間コマース業界でやってきました。その慣れ親しんできた業界から離れたのは数年ほど前です。自分が本当にやりたいことは何なのか。自分の実力や

自らの星はどのようなものなのか、その答えを出す意味で無の状態からスタートを始めました。時にはつぶれそうになる時もありますが、それでもわずかながらにも前進しているつもりです。

さいわい2年ほど前に、アメリカドキュメンタリー映画の第一人として有名なフレデリック・ワイズマン監督に自分の作品(写真)をみてもらった時に幾らか褒めて頂き、別れ際監督自ら握手を求めて下さったことが自分の中での励みとなっています。絵筆を持つ時は、ほとんど自分の表現の為の行為ですが、シャッターを押す意義にはもう一つの理由があります。それは次世代の子供たちへのメッセージのためです。ですから月田さんを含めあらゆる“人”を求めて瞬間に命をかけています。少しでもよい仕事ができるように日々反省と前進を心に刻みながら。(松山/S・T也)

(貴方がとって下さった、あったかくてさりげない、それでいて内面を、しっかりと写し出す様な一枚一枚。一年振りにひょっこりアートクラブのライブに顔を出し、渡されたそれらの写真を見て、私は朝まで過ごしました。動かないはずの写真が、私の中で動き始め、歌い、語り、心をざわめかせたのです。素晴らしい写真をありがとうございます。)

vamos cantar!

4月

訳詞：日置圭一

あなたの中の太陽がわたしの住処。
その中でわたしは大地を発見し、海を学ぶ。
古き帆船であるあなたの手を通して、
わたしは遠くの地に達する。
それは常に遠くにあったが、しかし身近にあったもの。

あなたはわたしの葡萄酒、わたしの糧、
わたしの音楽(ギター)そしてわたしの果実。わたしの船。
わたしは船に乗り込んだ。
あなたの中に四月の国[註]を発見するために。

わたしはあなたを悲しみの橋の上で探し、
そしてあなたを想像しながら歌った。
四月の国があなたを纏うときに歌った。
そして、わたしはあなたが誰なのか問いかけた。

あなたへの愛を歌った。
そしてあなたは私に純粋な大地と多くの優しさをくれた。
大地に接するところで、民衆に接するところで、
あなたのために歌った。
そして、あなたと出会って四月の国を見つけた。
そして、あなたと出会って四月の国を見つけた。

[註]この歌の歌詞を理解する為には、4月に対するポルトガル人の思い入れを理解する必要があると思う。

1974年4月25日、「カーネーション革命」とよばれる無血クーデターにより、半世紀に及ぶファシストのサラザール独裁政権を倒壊させた。自由への渴望が4月のその革命に託されている。秘密警察により投獄されていた人々は開放され、国外追放もしくは亡命していた人達も、祖国に帰り、その後、植民地解放等、紆余曲折政権は揺れに揺れたが、確実にポルトガルは、民主化への道を歩みはじめた。

ABRIL

Letra : Manuel Alegre
Musica : Alain Oulman

Habito o sol dentro de ti
Descubro a terra, aprendo o mar,
por tuas mãos, naus antigas,
chego ao longe
que era sempre tão longe, aqui tão perto.

Tu és meu vinho. Tu és meu pão,
Guitarra e fruta, Meu navio,
este navio onde embarquei
para encontrar dentro de ti, co país de Abril

E eu procurava-te nas pontes da tristeza
cantava adivinhando-te cantava,
quando o país de Abril se vestia de ti
e eu perguntava quem eras.

Meu amor por ti cantei. E tu me deste
um chão tão puro algarves de ternura.
Por ti cantei, à beira terra,
à beira-povo
e achei achando-te o país de Abril
e achei achando-te o país de Abril.

biografia

AMÁLIA

—ヴァイトール・パヴァオン・ドス・サントスに語った自伝—②

訳:松田美緒

第1章 わたしはわたしでありたかった〈その一〉

わたしは自分が生まれた日を知らない。わたしも家族の誰も知らない。家は大家族で、わたしが生まれたことはそれほど大きな出来事ではなかったからだ。7月1日だったという者もいれば、いや12日だった、4日だ、14日だ、とこんな感じでまともでない。祖母が云うには、わたしはさくらんぼの実る時季、5月から7月の間に生まれたそうなので、結局、誕生日を7月1日に決めた。しかしもう少し後になって試験のために戸籍書類を取り寄せてみると、なんと7月23日になっている。仕方がないから両方の日を誕生日にしてしまった。美味しいワインとドライケーキで1年のうちに2回も誕生パーティができるからだ。

生まれたとき、名付け親になりたいという叔母が二人いた。母の姉妹のマリア・ド・カルモと、もう一人は父の姉妹のアマリアだった。もうちょっとでマリア・ド・カルモになるところだったが最後に勝ったのはアマリア叔母さんで、その名に落ち着いた。マリア・ド・カルモは大好きだが今となってはアマリアという名前に慣れすぎていて、他の名前とわたしを結びつけることはできない。「アマリア」の大きく口を開いて出す「ア」の音が耳に心地よいのだと思う。

家族はみんなベイラ・バイシャの生まれなのに、たまたまわたしだけリスボンに生まれた。1920年、母は祖父の住むマルティン・ヴァス通りに住んでいた。父が仕事を探していたからで、わたしがリスボンに生まれたのはそのためだ。その後、運がなく仕事が見つからなかったので二人はファンダオンに戻り、わたしは祖母と一緒にリスボンに残った。その頃まだ14ヶ月で、母のもとへようやく戻ったのは14歳になってからだ。

母はお金はなかったが、子沢山だった。祖母にも同じくお金はなかったが、たくさんいる子供達はもう大きくなっていてもっと安定した生活を送っていた。

わたしの父は優しくとてもいい人だったが、音楽に夢中で休む暇なしに演奏活動であちこちをまわっていた。彼はホルン奏者で、とても重宝がられていたようだ。それはとていば、ファンダオンにはミュージカ・ノーヴァ(新しい音楽)とミュージカ・ヴェーリャ(古い音楽)という二つのバンドがあって、両方とも父の取り合いをしていたからだ。父はミュージカ・ノーヴァで演奏していたが、いつもバンドと一緒に国中をまわっていた。母もその後について行った。本当に落ち着かない生活だった。父の本業は靴職人だったが、ほんの少ししか作っていないと思う。

わたしの父、アルベルティーノ・ド・ジェズ・ロドリゲスはカステロ・ブランコの生まれだった。祖父はその辺りでは名の知れた靴職人だったが、ある日ファンダオンで働かないかといわれ、息子も連れて出てきた。いい職場で給料がずっとよかったからだ。そこで父が13歳の時、母、ルシンダ・ダ・ピエダデー・レボルダオンと出会いふたりは交際を始めた。結婚まで続くことになる若いふたりの恋だった。

ふたりが結婚したのは病院のなかだった。その頃父が当時はまだ難病といわれていた肺炎を両胸に患っていたからだ。その後病状は悪化し、気管支にまで感染し、さらに危険な肺気腫を引き起こすに至ってしまった。そして呼吸が少なくなり始め、音楽を続けるのは難しくなってしまった。だが父の音楽への愛は変わることなく、決して病気に甘んじることはなかった。楽器を吹くことへの情熱を失わず、ある時などはメキシコの横笛を持って帰ったこともあった。催しに参加する父についてまわるのが大好きだった母も、父が吹かないようにコレットを一つ残らず取り上げなければならなかった。

わたしの母方の祖父は、一財産あったはずだが、残らず賭博ですってしまった。一儲けしてある土地を手に入れたのだが、その土地は何やらそこにある泉から金の糸が見つかったという伝説のせいで「黄金のなる土地」として知られていた。わたしは祖父が話して聞かせる妖精の話が大好きだったから、その泉の伝説を確かめたくてしかたなかったものだ。祖父の苗字はレボルダオンと書いた。そこではその苗字がある家はほかにはなく、わたしにもついていない。

出生登録するときアマリア・ダ・ピエダデー・ロドリゲスとだけ書いたからだ。祖父の職業は土建業で、ファンダオンの一貴族トリゲイロス伯爵の屋敷を建てたことで多大な名声を得ていたのだが、稼いだ金を一切切切賭けにつぎこんでしまうのだった。祖母はそんな夫の悪癖を直し、よからぬ仲間から引き離そうとリスボンに来ることを考えた。夫の生活が変わることを願いながら。そんなわけで二人はここにやって来た。故郷に一、二度は帰ったが、亡くなるまでずっとリスボンで暮らした。

面白かったのはこの祖母のする話だった。残業中によく姉妹たちの話をしていたものだが、何でも彼女らは王妃の召使で、役人と結婚し、大屋敷に住んでいるらしい。きっと祖母の家は裕福だったのだろうが、両親の期待に背いて若輩者の祖父と結婚してしまったので皆に見放され、誰一人として彼女に会おうとはしなかったし、彼女のほうもそれっきり実家の敷居をまたぐことはなかった。彼女の母、わたしの曾祖母はたくさんのお金を渡したらしいのだが、誰もその在り処を知らないし、探そうともしなかった。時々わたしや叔父さん、叔母さんたちは、そのお金があったらなあ、と夢見心地に話していたものだ。

わたしの家は正真正銘の大家族だった。祖母には16人の子供がいて、孫も同じ数だけいた。毎週日曜に家族みんなが祖母の家に集まると、それはもう楽しいものだ。めいめい何か料理を持ち寄ると、とても豪華な昼食や夕食になった。その特別な日の終わりを飾るのは、

みんなで歌うベイラ・バイシャの民謡の「サンタルジア」や「たわわなトウモロコシ」、「Maça Camoesa」だった。その頃歌っていた曲は後になって何曲か録音した(「わたしが幼いとき」、「Martirios」)。みんな歌がうまかったが、その中でわたしの母は抜群だった。その次は母の妹のジョアキーナ叔母さん、それに父の妹のジュリア叔母さんもうまかった。



幼き日のアマリア

informação

- 『第七回河本賢治作陶展』が、6月20日(水)～26日(火) 阪急美術第三画廊で開催されます。テーマは「芽生え」だそうです。是非お出かけ下さい。
- ABCラジオ番組「ちょっといい話」(関西地区のみ)に出演、7分ほどおしゃべりします。
放送予定日 5月20日(日) 午前8時00分～8時10分
 8月 5日(日) 午前8時00分～8時10分
先日録音にいつてきたのですが、何せ時間が短いで、ライブの様に出ると喋る訳にはいかず、けたたましい程の早口で、冷や汗、脂汗、汗だくになりながら、おしゃべりしてきました。聞くのが怖い!
- 『きまぐれライブ Vol.6』今年は大阪「ブルーノート」で開催します。バナナホールは、椅子の座り心地が悪かったり、トイレが汚いとか、不評で、いろいろ会場探しをしたのですが、飲食ができて200名位のキャパとなると、結局、ホテルという事になるし、そうすると雰囲気作りが難しく、サンケイ企画の野口さんのお骨折りで、「ブルーノート」を借りることができ、月田はやる気満々、乞うご期待!!
- 関東方面世話役の齊藤氏がリスボンから帰国されました。恒例の東京でのライブを今年も7月頃企画して下さると思います。決まり次第ご案内させていただきますので、楽しみにしててください。

<月田秀子のスケジュール>

4月	4日(水)	大阪・南方「三裕の館」	*問合せ : 06-6304-1745
	19日(木)	福島・鏡石町立図書館「視聴覚ホール」	*問合せ : 0248-62-6084(月田)
	20日(金)	福島・船引「大鏡矢神社」	*問合せ : 090-8923-1861(柳沼)
	21日(土)	群馬・新田郡「やぶつか文化ホール」	*問合せ : 0277-78-7291(山口)
	22日(日)	埼玉・行田「興徳寺」	*問合せ : 0485-57-0999
	23日(月)	大阪・心斎橋「アートクラブ」	*問合せ : 06-6212-2870
	26日(木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	*問合せ : 075-361-3535
5月	2日(水)	大阪・南方「三裕の館」	*問合せ : 06-6304-1745
	9日(水)	京都「リーガロイヤルホテル」	*問合せ : 075-361-9149 http://www.rihga-kyoto.co.jp
	23日(水)	高松・香川県民ホール「五木寛之監修・スミセイライブミュージアム」	*問合せ : 06-6311-0618
	28日(月)	大阪・心斎橋「アートクラブ」ーほろ酔いライブ百回記念	*問合せ : 06-6212-2870
	31日(木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	*問合せ : 075-361-3535
6月	6日(水)	大阪・南方「三裕の館」	*問合せ : 06-6304-1745
	16日(土)	北海道・富良野「富良野演劇工場」	*問合せ : 0167-39-0333
	17日(日)	北海道・帯広「大樹町生涯学習センター」	*問合せ : 0155-86-5555
	20日(水)	北海道・札幌「京王プラザホテル」	*問合せ : 011-662-1848(村上)
	21日(木)	北海道・苫小牧「グランドホテルニュー王子」	*問合せ : 011-662-1848(村上)
	22日(金)	北海道・室蘭「蓬峽殿」	*問合せ : 0143-44-3338
	23日(土)	北海道・函館「カルマ」	*問合せ : 0138-55-3638(天野)
	24日(日)	北海道・函館「わか松旅館」	*問合せ : 0138-59-2171
	25日(月)	大阪・心斎橋「アートクラブ」	*問合せ : 06-6212-2870
	28日(木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	*問合せ : 075-361-3535
7月	1日(日)	大阪・桜橋「ブルーノート」 きまぐれライブVOL.6	*問合せ : 06-6343-3523
	28日(土)	東京・銀座「アルベリーテ」	*問合せ : 090-6344-2299(齊藤)

*7月の「三裕の館」でのライブは、お休みさせていただきます。22日の「きまぐれライブブルーノート」の方へぜひご来場下さい!

<編集後記>

編集している間に冬から春へ。季節外れの内容満載の四月号になりました。またまた春に置いてきぼりにされそう。最近とみに、ホームページを通じての問い合わせが目立つ。そろそろパソコンに切り換えなければならないのか。歌詞を覚えるので四苦八苦の月田に大きな課題です。

月田秀子ファド倶楽部ホームページ
<http://www.asahi-net.or.jp/~wc3k-smz/FADO/menu.html>

- 月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第30号
- 2001年4月1日発行(季刊:年4回発行)
- 編集・発行「月田秀子ファド倶楽部」事務局
- 〒543-0023 大阪市天王寺区味原町2-10-502
- TEL&FAX 06-6765-4808